

プレゼンテーションの実践指導について

A Study of Teaching by Presentation Practice

深谷 秀樹
FUKAYA Hideki

要旨

本稿は、筆者が東洋大学ライフデザイン学部で担当している授業科目「プレゼンテーション技法」における指導方法についての報告である。

本科目は、学生のプレゼンテーション実践を中心に進行していく。自らテーマを決め、必要な資料を収集・整理し、パワーポイントのスライドを作成してプレゼンテーションに臨む。発表にかかわる一連の過程を経験することと、人前で話すことに慣れるきっかけとすることをねらいとしている。また聴き手としてプレゼンテーションに参加することも重要であるので、各発表に対するコメントの記入を義務付けている。それにより、学生同士の相互評価の効果が期待できる。

近年の大学教育では、学生が主体的に取り組むアクティブ・ラーニングの重要性が提唱されている。本科目での取り組みが、そうした流れへの一助となればと考えている。

キーワード：プレゼンテーション 口頭コミュニケーション アクティブ・ラーニング 社会人基礎力

1. はじめに

近年、大学教育においては、初年次教育・導入教育が重視されてきている。特に、講義形式に代表される、学生が受身の立場で学ぶ授業から、演習・ゼミ形式のような、学生が主体的に参加する授業が増えてきている。そうした中で、学生にとっては自ら発信する機会が多くなってきたといえる。その一つの例としてプレゼンテーションがある。

筆者は、東洋大学ライフデザイン学部で「プレゼンテーション技法」(以下「本科目」とする)の授業を2008年度より担当している。本稿は、本科目におけるプレゼンテーションの実践指導について報告するものである。

2. 科目の概要

本科目は、ライフデザイン学部「基盤教育」内の「共通教養科目」として位置づけられており、学科・学年を問わず自由に履修できる選択科目である。2016年度の学科・学年別受講者数は以下のとおりである。

学科	1年	2年	3年	4年	計
生活支援	10	1	0	0	11
健康スポーツ	14	2	3	0	17
人間環境デザイン	62	17	6	8	93
計	86	20	7	8	121

学年で見ると、教養科目という性質上1年生の履修が多く、初年次教育のひとつとみることができよう。また学科では、専門科目において作品の制作とその発表を行う人間環境デザイン学科の学生が多い傾向にある。

なお本科目では履修者に制限を設けておらず、希望者は全員履修できる形であるが、近年履修者が多くなっており、2016年度の121名は過去最多人数である(2012年度27名、2013年度70名、2014年度60名、2015年度103名)。

次に、本科目のシラバスから、講義の目的・内容および学修到達目標を示す。

【講義の目的・内容】

プレゼンテーションの方法を学ぶことによって、自分の意図を相手に正確に伝える能力を養うことが、本講義の目的である。事前にスケジュールを決め、受講生全員に担当を割り当て、各自設定したテーマに基づいてプレゼンテーションの実践をおこなう。発表者以外の学生は、質問およびコメント用紙の記入という形で参加する。発表のしかたとともに、発表を聴く姿勢も重視する。以上の活動を通して、社会で必要とされる「社会人基礎力」の習得をめざす。

【学修到達目標】

1. 自らテーマを設定し、そのテーマに応じて必要な情報を収集・分析することができる（「課題発見力」「計画力」の養成）。
2. 文章・図表などを効果的に用いた発表資料を作成することができる。
3. 聴き手の立場を考慮した発表・報告・説明を通して、自らの意図を正確に伝えることができる（「発信力」の養成）。
4. 発表に対して質疑や意見表明ができる。また、質疑や意見に対して適切に応答することができる（「傾聴力」の養成）。

上記のように本科目では、「話し手」「聴き手」両方の立場から、プレゼンテーション実践に取り組むことを意図している。また近年は、経済産業省によって提唱されている「社会人基礎力」の養成も考慮している。学修到達目標に記した「課題発見力」「計画力」「発信力」「傾聴力」は、「社会人基礎力」において定められた能力に対応したものである。

3. 授業計画

続いて、本科目の授業計画について述べる。授業回数は半期開講の全15回である。シラバスより講義スケジュールと指導方法を示す。

【講義スケジュール】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 プレゼンテーションの技術—プレゼンテーションとは何か
- 第3回 プレゼンテーションの技術—プレゼンテーションの内容を考える
- 第4回 プレゼンテーションの技術—プレゼンテーションをする際の注意点
- 第5回 グループ単位での発表練習
- 第6回 個人発表のテーマ検討とスケジュール決定
- 第7回 個人発表の準備と事前指導
- 第8回 第1グループ担当学生による個人発表と質疑
- 第9回 第2グループ担当学生による個人発表と質疑
- 第10回 第3グループ担当学生による個人発表と質疑
- 第11回 第4グループ担当学生による個人発表と質疑
- 第12回 第5グループ担当学生による個人発表と質疑
- 第13回 第6グループ担当学生による個人発表と質疑
- 第14回 第7グループ担当学生による個人発表と質疑
- 第15回 まとめとレポート提出

※第6回以降は目安。全員が発表できるようにスケジュールを組む。

【指導方法】

最初の数回は講義形式で進めるが、それ以降はグループによるプレゼンテーション練習（グループ編成は抽選による）、及び個人によるプレゼンテーションの実践をおこなう。全体を通して受講生による授業参加が中心となるので、主体的・積極的な取り組みを期待する。実践を通して、学科・学年の枠を超えた学生同士の交流を図りたい。

※受講者数が多くなった場合は、個人発表をグループ発表に変更することもありうるが、可能な限り個人発表の形式をとりたい。

全15回のうち、前半は教員によるプレゼンテーションの方法論に関する講義、および発表の練習としてグループに分かれての自己紹介、発表の日程を決めることに充てる。よってプレゼンテーションの実践に充てられる授業回数は、全体の約半分にあたる7～8回程度である。前述の通り、本科目の受講者数は年度によりまちまちであるため、履修登録後の人数確定を受けて具体的なスケジュールを組むことになる。2014年度までは個人発表の形を維持してきたが、2015・2016年度は履修者が100名を超え、個人発表が困難となったため、グループ単位での発表とした。

4. 発表のテーマと事前準備

本科目のプレゼンテーション実践では、各々の発表テーマは学生が自由に決める形でおこなってきた。これは、自分（たち）でテーマを決めるという「課題の発見」を経験させるということ、学生が興味を持ったテーマで作業をおこなったほうが積極的な取り組みが期待できるということ、および受講者が3学科にわたるため1つの分野に絞るのが難しいという事情による。また担当教員にとっては、学生がどのようなものに興味を持っているのかを知るきっかけにもなる。ただしグループ発表の場合、メンバー全員が興味を持てるテーマを探すのが難しいという問題もある。

ここに、2016年度の各グループが発表したテーマを、ジャンルに分けて示す。

《飲食に関するもの》

- ・豆腐の魅力
- ・「鮭」について
- ・1番おいしいコンビニは？
- ・抹茶の魅力
- ・おにぎり
- ・日本のラーメン
- ・世界三大珍味
- ・世界の食事
- ・お菓子の紹介
- ・なぜ人は二日酔いになる？

《マンガ・物語・キャラクターに関するもの》

- ・ドラえもん
- ・本当は怖い童話達
- ・MARVELキャラクター紹介
- ・ディズニープリンセスの真実
- ・マンガ-MANGA-

《服飾に関するもの》

- ・スニーカーについて
- ・Paris Collectionやババ服

《その他》

- ・なぜお化けを信じてしまうのか
- ・パラレルワールド
- ・埼玉県の魅力
- ・危険な生き物たち
- ・イチローはすごい！
- ・恐怖症について
- ・じゃんけんで絶対に勝つ方法はあるのか
- ・就職活動

このように、発表のジャンルは多岐にわたるが、食べ物や飲み物に関するものが多い。これは身近なテーマであることから、聴き手にも共感を得やすいというねらいがあるのではないかと考えられる。反対に一般にあまり知られていないテーマを選択すると、テーマそのものの説明に時間を取られることになり、その部分が不十分であれば聴き手の理解を得られづらくなる。

こうしてテーマが決まると、続いて資料収集・整理・パワーポイントのスライドおよび発表原稿の作成といった発表の準備に入るが、授業内では作業する時間が取れないため、準備はすべて授業外学習となる。そのためグループ発表の場合、メンバーが集まって作業する時間が取りづらい、個人によって取り組み姿勢に差が生じる（積極的な学生に任せてしまう者が出る）、別々に準備をしたために発表全体の整合性が取れていない等の問題が生じる場合がある。

また、発表ではパワーポイントを用いるが、情報処理の科目ではないので、パワーポイントの操作方法もほぼ学生の自主学習に任せざるを得ないのが現状である。

5. プレゼンテーションの実践——話し手と聴き手——

以上のような準備作業を経て、プレゼンテーションの実践に進む。発表日ごとの担当者（グループ）は事前に決め、その計画通りに進行する。教室には担当教員がPCを準備し、発表者（グループ）は事前にパワーポイントのデータを用意する（従来は発表当日に持参する形としていたが、データの読み取り等で手間取ることが多かったため、大学の課題提出システムを用いた事前提出に改めた）。

そのパワーポイントのスライドをスクリーンに映しながらプレゼンテーションをおこなう。ここでは人前で話すことが重要であるため、グループ発表の場合でも、話すのは全員が交代で担当するようにした。なお発表時間は、個人発表では5分から20分、グループ発表では1人2～3分程度である。

いっぽう、プレゼンテーションの場においては、聴き手の立場もまた重要である。本科目では聴き手としてプレゼンテーションに参加することを明確に意識させるため、発表者（グループ）以外の学生にはコメント用紙の記入を義務付けている。コメントの項目は

1. プレゼンテーションの要点
2. 納得できた点、見習いたいと思った点
3. あまり納得できなかった点、改善したほうがよいと思った点
4. その他（任意）

の4点からなり、1発表当たりの記入スペースはA4用紙の1/3程度である。このコメント用紙は各学生の聴き手としての取り組みを評価するための資料とするほか、記入者を伏せたコピーを発表者本人に渡して発表の振り返りの材料としている。こうした形で学生同士の相互評価をおこなうことには大きな意義があると考えている。自ら発表をおこなう話し手としての参加のみならず、聴き手としてプレゼンテーションの場を共につくるという意識を持たせることを、本科目ではとくに重視している。

聴き手の参加としては、コメント以外に口頭の質疑応答も従来おこなっていたが、2016年度は質疑の時間を取るのが難しく、教員の講評のみとした。

6. 発表のまとめと評価

本科目では、プレゼンテーションの内容のまとめとして、レポートの提出を期末試験の代わりとしている。レポートの内容は、各自が発表したプレゼンテーションのテーマ（グループの場合はその中で自分が担当した部分）を文章化するものである。プレゼンテーションもレポート作成も途中までの準備の過程は共通しており、最終的に口頭で話すか文章に書くかの違いということになる。よってプレゼンテーションの準備を入念におこなうことは、レポートや卒業論文等の作成の際にも役立つものといえる。またレポートと同様に、文献やWEB上の情報を発表に利用する際は、引用元を明示し、自らの意見と明確に区別するように、またWEB情報を用いる場合は、出典元がしっかりしたものをを用いるように指導することも肝要である。

このレポートを含め、本科目での成績評価の要素は大きく3項目に分かれる。全体における割合は、

1. 発表内容（担当教員による評価に加え、他の学生によるコメント評価も考慮する）（30%）
2. 他学生の発表に対する質疑・コメント・聴講態度（40%）
3. 期末レポート（自身の発表内容を文章にまとめる）（30%）

としている。2のコメントや聴講態度に40%を充てているのは、聴き手としてプレゼンテーションに参加することを重視した結果である。

7. 学生からの声

上述の期末レポートでは、授業に対する感想・意見も付記するよう学生に求めている。その中からいくつか取り上げてみたい。

まず、学生の多くは人前で話すことに慣れておらず、発表することに不安を持っているということである。それは発表の際の態度にも表れ、視線がPCや原稿に向いてしまっていて聴き手を見ていないものが大半であった。しかしこれは話す経験を重ねるうえで徐々に慣れていけばよいことで、まず第一歩としてプレゼンテーションをおこなったという実績が自信につながればよいと筆者は考えている。

次に、相互評価として聴き手からのコメントがもらえるのがよいということ。自分のプレゼンテーションを聴き手の立場から振り返ることができるのが大きいと思われる。中には厳しい意見もあるが、それも今後役に立ててもらえればと思う。

またグループ発表という形式については、賛否両方の意見があった。良い点としては、グループで協力して取り組むことで協調性を身に着けることができた、助けてくれたメンバーに感謝できた等である。一方悪い点としては、全員が興味を持てるテーマが一致せず、妥協せざるを得なかったこと、集まって準備するのが難しく、結果的に発表内容に重複や食い違いが起きてしまったこと、グループ内で積極的な者とそうでない者の差が生じてしまったことなどがある。グループ発表には利点もあるが、本科目が初めてのプレゼンテーションである受講者が多いことを考えると、個人発表でおこなうことが望ましいと考える。

8. 今後の課題

以上、プレゼンテーションの実践という授業方法について述べてきた。一般に教養科目というと、大人数の講義形式でおこなわれることが大半である中で、学生参加型の授業をおこなうことは一応の意義を見出すことができるのではないかと思う。一方で、不十分な点もまだ多い。ここでは、今後本科目を展開していく上での課題についてまとめておきたい。

- ・前半の講義部分において、プレゼンテーションの技術的な方法論についてより具体的に示す。
- ・PC（パワーポイント）の操作方法についても講義で扱う。
- ・コメント用紙の記入項目や方法について（点数評価等を取り入れるか等）再検討する。
- ・聴き手に当たる学生に、より積極的に参加できるような工夫を施す。
- ・大人数では一人一人への指導が難しいため、受講者を一定数に絞る。

これらの中にはすぐに実行できない事柄もあるが、学習効果をさらに高めるため、今後も授業方法を工夫していきたいと考えている。

参考文献

- 外山敦子「国文学科における『実践日本語表現法』の実践報告——プレゼンテーションの方法——」(『愛知淑徳大学国語国文』第29号、2006年3月)
- 牧恵子「教員養成課程初年度における「プレゼンテーション」を用いた授業の報告」(『教養と教育(愛知教育大学)』第9号、2009年3月)
- 井上雅彦「大学における協働的な授業の試み——スピーチ・グループワーク・プレゼンテーションを用いた「日本語口頭表現法」の授業——」(『安田女子大学紀要』第38号、2010年2月)
- 細川美穂「「プレゼンテーション演習」授業実施報告」(『国際短期大学紀要』第24号、2010年3月)
- 関由佳利「研究授業「プレゼンテーション演習Ⅰ」の実践報告」(『研究紀要(高松大学)』第54・55号、2011年2月)
- 高橋啓太「教養科目におけるプレゼンテーション授業の考察」(『九州共立大学研究紀要』第7巻第1号、2016年9月)
- 経済産業省「社会人基礎力」 <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> (2016年11月10日閲覧)

A Study of Teaching by Presentation Practice

FUKAYA Hideki

Abstract

This thesis is the report about guidance of presentation that I take charge. Student's presentation is the main contents for the class.

It's an aim that they're experienced to experience a series of work of presentation and speak by the public. And they write an opinion to an announcement and learn the role of the listener.

I wish that this report is useful for a study of active learning.

Keywords: presentation, oral communication, active learning, Fundamental Competencies for Working Persons